第4章　系統保存の方向性と課題

29 生物多様性を考慮した淡水魚保護（細谷和海）　30 淡水魚の減少要因と回復への道（長田芳和）

（新井良一　Ryoichi Arai: 〒113-0033 東京都文京区本郷7-3-1 東京大学大学院理学系研究科生物科学専攻）

図書紹介・New Publications

魚類学雑誌
45(1): 52

□ 魚類学一般

Deep-sea Fishes. —D. J. Randall and A. P. Farrell (eds.). 1997. Fish Physiology Series 16. Acsademic Press, London. xvi+388 pp. ISBN 0-12-350440-6. Fish Physiologyシリーズの第16巻．深海魚のさまざまな生物学的側面を論じた計9つの論文からなる．その道の専門家には向いてないが，門外漢の人が深海魚の知識を得るには便利な本．　(MM)

□ 分類学・進化学

Species: The units of Biodiversity. —M. F. Claridge, H. A. Dawah and M. R. Wilson (eds.). 1997. The Systematic Association Special Volume Series 54. Champan & Hall, London. xvi+439 pp. ISBN 0-412-63120-2．種に関する実践的な側面と哲学的な側面を扱った論文計19篇からなる総説集．魚類における種の問題を扱った論文はないが，海産無脊椎動物における種 (N. Knowlton)，保全生物学における種 (J. Cracraft)，理想的な種概念 (D. L. Hull)，種概念の階層性 (R. L. Mayden)等の問題を取り上げた論文は読み応えがあるし，近年の種をめぐる論争を知るうえでたいへん有用な本．　(MM)

生物系統学．—三中信宏．1997．東京大学出版，東京．xiv+458 pp. ISBN 4-13-060172-5. 5600円．日本語で書かれた初めてのまともな生物系統学の本．入門書ではないが，本書を読みこなせればもう系統学で怖いものはない．今後は我が国でも，本書を出発点に健全な系統学の発展が望める．　(MM)

□ 魚類生態学

水産動物の成長解析．—赤嶺達郎・麦谷泰雄（編）．1997．恒星社厚生閣，東京．122 pp. ISBN4-7699-0855-5. 2300円．1997年4月に開催された日本水産学会春季大会でのシンポジウムをまとめたものである．水産動物の成長解析の基礎となる年齢形質に関する最新の技法と情報，成長理論と解析法，およびシャコ，サメ・エイ類，スケトウダラ，サンマとマダラなどを対象動物とした成長解析や成長様式の実例が紹介され，生態や資源解析に興味のある者に参考となる一冊．(AG)

□ その他

Marine Biodiversity: Patterns and Processes. —R. F. G. Ormond, J. D. Gage and M. V. Angel (eds.). 1997. Cambridge Univ. Press, Cambridge, U.K. xxii+449 pp. ISBN 0-521-55222-2．海洋における生物多様性をさまざまな角度から論じた計18篇の論文からなる総説集．深海から沖合，沿岸まで考えられるかぎりすべての海洋環境における生物多様性を網羅しているので，たいへん便利．　(MM)

会員通信・News & Comments

魚類学雑誌
45(1): 52–54

中村守純先生を悼む
Memories of Dr. Morizumi Nakamura (1914–1998)

中村守純先生が1998年1月19日逝去された．先生は，1990年脳梗塞のため入院，その後回復されて自宅でリハビリに励む毎日であったが，1995年嚥下障害のため再入院，さらに1997年2月三度めの入院加療中肺炎を併発し，ついに帰らぬ人となった．享年83歳であった．

駒込生まれの駒込育ち，駄のつくほどのシャレ好きで口が悪い，巨人大鵬卵焼，ビールはサッポロ，昼はかつ

丼，犬とカミナリ大嫌い，嫌いは嫌い，好きは好き．他の追随を許さぬ淡水魚類学の泰山北斗であられたが，卒論生としてお世話になったころの私の印象は，失礼ながら，気のいいわがままな江戸っ子爺さんというものであった．そう思われたのは，20年にわたるコイ科魚類生活史の研究を纏め上げ，日本で初めての生態写真による図鑑を発刊し，国の一大事業であった利根川河口堰建設の影響予測調査を終え，日本農学賞を受けたばかり，退官を数年後に控えた当時の先生にとって，私が孫のように見えていたからではなかろうか．

子供の頃からの魚好きが嵩じて農林省水産講習所（現在の東京水産大学）に進んだ先生は，当時助手であった松原喜代松先生の勧めで，養殖科3年のときに「小湊実験場附近のTide-pool fishに就いて」という処女論文をものにしている（養殖会誌，4巻10号，1934年）．自ら披歴することはなかったが，問われて答える海産稚仔魚についての底知れない知識には，周りの皆が舌を巻いた．それはこの時の仕事と松原先生との親交によってすでに学生時代に培われていたことが伺われる．その後海産魚に関する論文は一切ない．

卒業論文は稲葉伝三郎先生のご指導による．稲葉先生とは利根川調査等でもおつきあいがあり，後年はお二人でよく那珂川までアユのドブ釣に出かけていた．しかし，中村先生が指導した最初の卒論生で栃木県水産試験場にいた有馬武司氏によれば，そういう時こそ日頃抱えた問題を解決せんと試験場職員らが取り巻き，ほとんど釣にならなかったそうだ．

岡田彌一郎先生のご推薦で，1936年卒業と同時に滋賀県水産試験場に就職した．その時にコイ科魚類の生活史研究に打込む意を決したらしい．場長（青木三雄氏）に許しを得て，当時すでに稚魚研究の第一人者であった内田恵太郎先生を釜山の朝鮮総督府水産試験場に訪ねている．「原色淡水魚類検索図鑑」（北隆館，1963年）に寄せた内田先生の序によれば，早朝連絡船でやって来て，立て続けに70余項目の質問を果たし，その晩の連絡船で帰って行ったそうだ．

再び岡田先生のお世話により，1942年文部省資源科学研究所（1969年国立科学博物館に吸収合併）に移った．環境も整い本格的な研究体勢に入るが，1945年終戦前の大空襲で9年間かけて蓄積した資料と標本のほとんどを焼失してしまう．一年早く資源研に移っており，終戦後に舞鶴に移った石山（清石）禮蔵先生とは，滋賀水試時代から切磋琢磨した．

中村先生はまさに焼跡から再出発し，それから15年をかけて当初の目的を全うすべく日本のコイ科魚類全53種及び亜種の生活史を調べ上げ，1960年内田恵太郎先生の審査を受けて九州大学から農学博士号を取得する．原稿だけでミカンの木箱いっぱいあり，運ぶのにリヤカーを使ったという．「日本のコイ科魚類」（資源科学研究所，1969年）としてそれを発刊するのは9年後，この業績が評価されて日本農学賞を受けたのがさらに5年後の1974年である．先生は生涯で関連の論文を約40篇著わしている．ほとんどの種の産卵期が春に集中するコイ科魚類の個体発生と生活史を，酸素もエアポンプもなく，足といえば国鉄しかなかった時代に全国をまたにかけて調査したことを考えると，この成果は驚異的と言わざるを得ない．しかも同時進行で岡田先生との共著の図鑑も2冊書いている（「日本の淡水魚類」1948年，「日本産淡水魚類図鑑」1951年，共に日本出版社）．

博士号取得後の3年間は，日本初の生態写真図鑑である「原色淡水魚類検索図鑑」の作成に没頭する．現在ではさほど珍しくないが，当時の状況では，あのタナゴ類の婚姻色の写真は驚愕に値する．その頃の様子は，卒論の資料を集めながら実際に東奔西走した倉若欣司氏の著書「意味論」（どうぶつ社，1992年）に生き生きと描かれている．

折しも東京オリンピックを直前に列島改造の気運が盛り上がっており，中村先生は利根川河口堰建設影響予測調査に携わっている．調査を中心的に手伝い，後に水資源開発公団に移った竹内直政氏によれば，先生は常々「開発に賛同はしないが，誰かが調査をやらねばならないのなら，可能な限り魚類への影響を軽減したいから」とおっしゃっていたそうだ．今でこそ建設省も生物学者の意見を尊重するが，当時はどうであったろうか．先生は，漁業者との間に入って相当不愉快な思いをされていたと聞く．長良川河口堰に関しても，「せっかくダムなどないのだから長良川はアユの川として保全を，建設省に生物学者を」と今西錦司・本荘鉄夫両先生との鼎談（淡水魚5号，1979年）でも強く語り，建設にはずっと反対なさっていた．

その他にも各地の河川調査を行い，その報告書は約20篇に及ぶ．それらの調査を中心に先生が資源研時代に全国から集めた標本は，淡水・汽水魚類241種及び亜種120万個体もあり，すべて国立科学博物館にそのまま移管されている．松浦啓一・新井良一両氏によってデータベース化され，5分冊の目録（国立科学博物館淡水魚類目録旧資源科学研究所標本1–5，1992–1996年）に纏められていつでも部外者に利用できるようになっている．

論文や報告書の他に，科学，自然，自然保護関係の雑誌に200篇以上の稿を寄せている．日頃から，淡水魚保護には一般への啓蒙が必要と説かれていた先生らしい．先生のご次男中村明氏によれば，あちこちから原稿依頼があっても，義理を欠くからといって例えば保護関係ならこれ，愛好者関係ならあれといった具合に雑誌を決め，他は断わっていたようだ．「日本のコイ科魚類」でお世話になった緑書房の「フィッシュマガジン」，日本釣振興会や日本友釣同好会などで親しかった小口修平氏の「つり人」，淡水魚保護協会会長木村英造氏の「淡水魚」などへの稿が特に多い．

中村先生は，岡田先生・松原先生・石山先生らと共

に日本魚類学会創立時のメンバーであり，しばらく学会誌の編集に携わっていた．また，学会長の要職を二期勤めている（1976–1978年，1982–1984年）．本当は，そのような人前に出なければならない役職が先生は嫌いであった．だが請われて断われず，国や県の内水面，水質，公害関連の委員もあまたこなしていた．持ち前の歯に衣着せぬ発言のため，お払い箱のごとく縁の短かった委員会（神奈川県など）や，逆に30年近くもお願いされていた委員会（千葉県など）もあった．

1964年には，国際自然保護連合 (IUCN, International Union for Conservation of Nature and Natural Resources)淡水魚部門（座長R. R. Miller 博士）の唯一の日本委員に選出され，ミヤコタナゴ，アユモドキ及びネコギギを「Red Data Book」(IUCN, 1969年）に登録した．これら3種にイタセンパラを加えた淡水魚類4種の国の天然記念物指定（1974年，1977年）も先生のご尽力による．1977年には環境庁の自然環境保全基礎調査検討会委員，1986年からは野生生物保護対策検討会汽水・淡水魚類分科会の座長を勤めた．日本版「レッドデータブック」（環境庁編，財団法人自然環境研究センター，1991年）作成及びその後の希少淡水魚保護対策策定に果たした先生の役割は測りしれない．

私はイワシ漁家の生まれで，淡水魚に特に興味があったというわけではなかったが，中村先生と旧資源研の建物，そしてそこに集まった学生たちなど有象無象の雰囲気に引きずり込まれ，淡水魚に関わったまま現在まで来ている．学生運動が盛んであったこともあり，当時の学生たちは必ずしも中村先生の願った道を歩んで行ったとは限らない．紆余曲折あった後に秋田に居を構えた杉山秀樹氏は，「秋田の淡水魚」（秋田魁新報社，1985年）を著し，中村先生から“足で稼いだ事実に基づいている”といういかにも先生らしい巻頭推薦文を頂いている．広瀬・名取川調査を3年間中心となって行なった高取知男氏は，そのまま仙台市科学館に迎えられ自然保護の実践，教育，普及に努めている．高校生のころから出入りしていた君塚芳輝氏も川と淡水魚に関わっている．私は同期の佐藤光昭氏と共に，卒業論文で集めた南西諸島の河川魚類を遅まきながら報告及び目録として纏めようと相談が成った矢先のことであった．それぞれが中村先生のご遺志のほんの一部ずつながら受け継いでいることを先生にご報告申し上げたい．

内田恵太郎先生の物真似だからと言っていつも謙遜されていたが，中村先生の稚仔魚のスケッチは緻密で芸術的で素晴しかった．私は未だお二人のスケッチを超えたものを見たことがない．内田先生は中村先生を“同学の魚痴”と呼んだ．お二人のような魚痴はもはや世に現われないのではないか．私たちは一つの時代を喪失してしまったという感が強い．

（酒井治己　Harumi Sakai: 〒759-6595　下関市永田本町2-7-1，水産大学校）

魚類学雑誌
45(1): 54–55

故加福竹一郎博士
the late Dr. Takeichiro KAFUKU
(1916–1997)

加福竹一郎博士のご逝去を悼む
Memories of Dr. Takeichiro Kafuku (1916–1997)

元水産庁淡水区水産研究所で養殖部長を務められた加福竹一郎博士は，1997年10月3日東京都府中市において逝去されました．享年81歳でした．加福博士は，曲がったことや，筋の通らないことがお嫌いで，正にお名前の通り竹を割ったような男らしい御生涯でした．

博士は1941年12月に台北帝国大学理農学部生物学科を卒業され，翌年2月から1945年9月まで軍務につかれました．終戦後は台湾総督府水産試験場に職を得られ6ヶ月勤務されましたが，1946年4月には本土に引揚げられました．同年6月より帝国女子専門学校（現在，東邦大学理学部）の教壇に立たれ，助教授，後に教授として生物学実習など学生の指導をされるとともに大学の運営に力を尽されました．1947年9月には農林省水産試験場に奉職され，魚類学雑誌に1950年掲載の不朽の御高著『魚類の結合筋について（第1報）比較解剖学上より観たカツオ・マグロ類の結合筋について』は，博士の研究者としての活動を示す第一歩でした．

1949年6月に農林省水産試験場の改組に伴い，博士は東海区水産研究所所属となり，翌年4月には新設された水産庁淡水区水産研究所湖沼部に転じられ，同年12月には湖沼部増殖科長に昇任されました．1960年5月には，同研究所養殖部育種科長に転じられ，1964年1月に所内の組織替えにより育種研究室長となり，さらに1969年4月には養殖部長に栄進され，ティラピア類，中国の四大家魚など外国産有用淡水魚類の繁殖技術開発の研究と研究管理に活躍され，数多くの成果を上げられました．また，東南アジア漁業開発センター (SEAFDEC)

養殖部局の開設に尽されるなど，開発途上国における内水面増養殖技術の発展に大きく貢献をされました．1975年8月には国際的な活躍と功績により，国際協力事業団から第1回功績賞を受けられました．

1976年2月に退官後は，海外漁業協力財団の専門家，国際協力事業団の特別嘱託，（株）国際水産技術開発の特別顧問などを歴任され，開発途上国への淡水魚の増養殖の技術移転に大きく貢献され，多くの人材を育成されました．

博士の研究業績は広範ですが，一貫して機能形態学を基盤とした淡水魚の増養殖に関するものでした．特に，腸の巻き方（腸型）を分類形質としたコイ科魚類の種の分化と系統を論じる御研究は，生涯を通して推進された中心的なもので，1995年に著された一連の研究のモノグラフ『ユーラシアのコイ科魚類—腸型パターンによる分類の試み』（国際水産技術開発，133 pp.）からも博士の腸型を指標とするコイ科魚類の系統研究への強い情熱が窺われます．

日本魚類学会の創設にも博士は貢献され，評議員・編集委員・会計監査役などを務められ，本学会の円滑な運営と発展に尽力されました．また，魚類学の面白さと重要性の啓蒙に努められ，御高著『魚の社会学』（共立出版，214 pp, 1980）や "Modern Methods of Aquaculture in Japan" (Elsevier, 272 pp, 1992)（池ノ上宏氏と共著）などがその例です．さらに，今上天皇陛下（当時，皇太子殿下）には魚類学，特に淡水魚の増養殖と系統進化について度々ご奏上されました．

このように視野の広い指導者を失ったことは魚類学会にとって大きな損失で，悲しみの極みです．博士のご生前のご指導とご貢献に深く感謝するとともに，謹んで哀悼の意を表します．

（福所邦彦　Kunihiko Fukusho: 〒516–0193 三重県南勢町　水産庁養殖研究所）

魚類学雑誌
45(1): 55

魚類の生態，社会，行動に関するメーリングリスト "sakana" の紹介

メーリングリストsakanaは「魚類の生態，社会，行動」の研究に関するメーリングリストです（メーリングリストについては，魚類学雑誌．1995. 41 (4): 480を参照）．京都大学と大阪市大の大学院生を中心に，1996年1月に開設されました．情報交換と議論の場を提供することによって，参加者相互の研究活動と，魚類の生態，社会，行動学の発展に貢献することを目的にしています．これまでのところ，各自の研究内容に関する議論の他に，ゼミ・研究会のお知らせなどに利用されています．

現在の登録者数は約100名（1998. 3月現在）．学部生や院生，教官，研究所員など，さまざまな立場の人が参加しています．また沖縄から北海道まで全国各地のメンバーがおり，いろいろな場所の情報も得ることができます．

現状では投稿量はそれほど多くありません．しかし，今後もっと多くの魚類研究者に参加していただくことによって，より活性化されることを期待しています．興味のある方は、ぜひご参加下さい．また，すでに登録されているという方，もっと投稿しましょう（特に院生）！

参加希望の方は，下記の要領で登録／投稿してください．

Subject（標題）は空欄，署名無しで
SUB sakana 自分の名前（半角英数）
（例：SUB sakana Nozomi Mizushima）
とだけ書き，登録／設定／コマンド用アドレス
autoshare@ci.zool.kyoto-u.ac.jp
に送ります．しばらくすると，サーバから登録完了のメールが送られて来ます．返信が来ない場合は，メーリングリスト管理者へお問い合わせ下さい．

"sakana"メーリングリスト・サーバ管理者（代表）
水島　希
Nozomi Mizushima
京都大学理学部動物学教室
〒606–01 京都市左京区北白川追分町
TEL: 075–753–4099
FAX: 075–753–4113
e-mail: nozomi@ci.zool.kyoto-u.ac.jp

（水島　希　Nozomi Mizushima: 〒606–01 京都市左京区北白川追分町　京都大学理学部動物学教室　e-mail: nozomi@ci.zool.kyoto-u.ac.jp）

魚類学雑誌
45(1): 55–56

科学研究費「自然史科学」の申請への協力について

文部省科学研究費「自然史科学」が1997年度（平成9年度）–1999年度（平成11年度）の時限付分科細目として認められたことを総会や年会の懇親会でお知らせしてきました．しかし，昨年度の申請件数があまり多くなかったことが自然史学会連合（32学協会で構成）の運営委員会で報告されました．申請件数が一定の水準に達しないと，時限付の分科細目から通常の分科細目に移行するのは難しいそうです．運営委員会は，「自然史科学」に参加学協会の会員が申請するよう要請しています．魚類

学会の会員にとっても重要な事ですので，会員の皆さんのご協力をお願いします．なお，自然史学会連合については45巻2号で詳しく紹介します．

（松浦啓一　Keiichi Matsuura：〒169–0073 東京都新宿区百人町3–23–1　国立科学博物館動物研究部 e-mail: matsuura@kahaku.go.jp）

魚類学雑誌
45(1): 56

「小笠原の魚類」購入ご案内

本誌44巻1号でご紹介したRandall et al.の小笠原の魚類に関する論文に残部があります．この論文は国立科学博物館のMonographs No. 11に掲載されています．小笠原諸島の沿岸性魚類97科801種が収録され，117枚のカラー写真が示されています．購入ご希望の会員は2310円（送料・税込み）を郵便振替で下記までお送り下さい．

送金先：00150–8–22146　財団法人科学博物館後援会．
問い合わせ先：〒110–8718　東京都台東区上野公園7–20　財団法人科学博物館後援会
電話：03–5814–9108；ファクス：03–5814–6757

Randall, J. E., H. Ida, K. Kato, R. L. Pyle and J. L. Earle. 1997. Annotated checklist of the inshore fishes of the Ogasawara Islands. National Science Museum Monographs, No. 11, 74 pp., 19 pls.

（松浦啓一　Keiichi Matsuura: 〒169–0073 東京都新宿区百人町3–23–1　国立科学博物館動物研究部　e-mail: matsuura@kahaku.go.jp）

会記・Proceedings

魚類学雑誌
45(1): 56–57

オークション開催のお知らせ

1998年度年会の懇親会において書籍類のオークションが行われます．売上金は今後の年会に参加する学生への旅費の一部として援助される予定です．つきましては不要になった書籍類のご寄付をここで募るとともに，ひとりでも多くの方の懇親会へのご参加をお願いいたします．

オークションに関するお問い合わせは庶務幹事（瀬能：TEL 0465–21–1515, FAX 0465–23–8846; 須之部：TEL 043–265–3111, FAX 043–266–2481）まで，書籍のご寄付につきましては今回会場となる高知大学の佐々木邦夫氏 (TEL 0888–44–8316, FAX 0888–44–8356)までご連絡下さい．

電子出版サービスのご案内

学会では（株）国際文献印刷社の協力を得て電子出版サービス（Infoket電子出版サービス）の実験を行っています．学会誌に掲載されている論文（一部）をネットを通じて購入することができます．本サービスは（株）国際文献印刷社のホームページ〈http://www.iijnet.or.jp/BUNKEN〉や学会ホームページ〈http://wwwsoc.nacsis.ac.jp/isj/index.html〉のお知らせの項目からアクセスすることで会員，非会員を問わずどなたでも利用できます．ただし，現在のところ以下の制約がありますのであらかじめご了承下さい．

1) 利用可能なパソコンはPC (Windows 95またはNT 3.51)，ブラウザはNetscape Navigator（Ver. 2.0以降）またはMicrosoft Internet Explorer（Ver. 3.0以降）のみ．
2) サービスを受けられるのは日本国内のみ．

1997年第6回役員会

1997年9月30日（月），於　横須賀市自然博物館1階講堂．出席者：沖山，林，瀬能，篠原，松浦，河野，上野．

1. 前回議事録の確認．
2. 報告事項　編集：現在までの投稿論文数は英文誌67篇，和文誌11篇で合計78篇．Ichthyol. Res., 44 (4)，魚雑44 (2)は11月下旬に出版予定．会計：評議員会・総会で承認を得る書類の修正案を作成した．庶務：評議員会・総会の資料の草案を作成した．
3. 1997年度年会の準備について：発表会場，懇親会会場およびその他の施設を確認した．年会参加申し込みは最終的に参加者225人で発表数122件．要旨集については400部準備した．アルバイト人員の配置と懇親会の準備状況（オークションのための寄付の集まり具合など）について説明があった．
4. その他：インターネットパブリッシング実験の経過報告（庶務から）．